

今回は芥川龍之介の「龍」という作品です。

途方もなく鼻の大きな法師が、日ごろ自分の鼻を笑っているものたちを驚かせてやろうと、猿沢の池のほとりに「この池に住む龍が3月3日に現れ、天に上る」と書いた高札を立てる。するとその高札を見た人々の口から口へ猿沢池の龍のうわさが伝わり、本当に龍の正体を見たというものまで現れ、騒ぎはドンドン大きくなっていく。とうとう、あれは自分が書いたと言い出せないまま3月3日になり、法師はもしかしたら本当に龍が昇るのではと思い始め、その日、猿沢の池に出掛けて行った法師が見たものは……



芥川龍之介の作品を原文のまま抜粋してご紹介しましょう。

その大鼻の<sup>えいん ほうし</sup>恵印法師が、ある夜の事、弟子もつれずにただ一人そっと猿沢の池のほとりへ参りまして、あの<sup>うねめ</sup>采女柳の前の堤へ、

『三月三日この池より竜昇らんずるなり』

と筆太に書いた<sup>たてふだ</sup>建札を、高々と一本打ちました。けれども<sup>えいん</sup>恵印は実の所、猿沢の池に竜などがほんとうに住んでいたかどうか、心得ていた訳ではございません。ましてその竜が三月三日に天上すると申す事は、全く口から出まかせの<sup>ほら</sup>法螺なのでございます。いや、どちらかと申しましたら、天上しないと申す方がまだ確かだったのでございましょう。

ではどうしてそんな入らざる真似を致したかと申しますと、恵印は日頃から奈良の<sup>そうぞく</sup>僧侶が何かにつけて自分の鼻を笑いものにするのが不平なので、今度こそこの鼻<sup>はな</sup>蔵人がうまく一番かついだ<sup>あげく</sup>拳句、さんざん笑い返してやろうと、こう云う<sup>こんたん</sup>魂胆で<sup>いたずら</sup>悪戯にとりかかったのでございます。御前などが御聞きになりましたら、さぞ笑止な事と思召<sup>おほしめ</sup>しましょうが、何分今は昔の御話で、その頃はかような悪戯を致しますものが、とかくどこにもあり勝ちでございました。

さてあくる日、第一にこの<sup>たてふだ</sup>建札を見つけましたのは、毎朝興福寺の如来様を拝みに参ります<sup>しゅうず</sup>婆さんで、これが珠数をかけた手に竹杖をせっせとつき立てながら、まだ<sup>もや</sup>靄のかかっている池のほとりへ来かかりますと、昨日までなかった建札が、采女柳の下に立って居ります。

はて法会の建札にしては妙な所に立っているなど不審には思ったのでございますが、何分文字が読めませんので、そのまま通りすぎようと致しました時、折よく向うから<sup>へんさん</sup>偏衫を着た法師が一人、通りかかったものでございますから、頼んで読んで貰いますと、何しろ『三月三日この池より竜昇らんずるなり』で、

誰でもこれには驚いたでございましょう。その婆さんも呆気にとられて、曲った腰をのしながら、『この池に竜などが居りましようかいな』と、とぼんと法師の顔を見上げますと、法師はかえって落ち着き払って、

『昔、唐のある学者が眉の上に瘤こぶが出来て、痒かゆうてたまらなんだ事があるが、ある日一天にわか俄かに搔き曇って、雷雨車軸を流すがごとく降り注いだと見てあれば、たちまちその瘤がふつつと裂けて、中から一匹の黒竜が雲を捲いて一文字に昇天したと云う話もござる。瘤の中にさえ竜が居たなら、ましてこれほどの池の底には、何十匹となく蛟こうりゅう竜、毒蛇わだかまが蟠わだかまって居ようも知れぬ道理じゃ』

と、説法したそうでございます。

何しろ出家に妄語はないと日頃から思いこんだ婆さんの事でございますから、これを聞いて肝を消しますまい事が、

『成程なるほどそう承りますれば、どうやらあの辺の水の色が怪しいように見えますわいな』で、まだ三月三日にもなりませんのに、法師を独り後に残して、喘あえぎ喘あえぎ念仏を申しながら、竹杖をつく間もまだるこしように急いで逃げてしまいました。後で人目がございませんでしたら、腹を抱えたかったのはこの法師で

これはそうでございましょう。実はこの法師こそはあのほつとうにん発頭人のとくごう得業恵印、あだな諱名は鼻蔵が、もう昨夜建てた高札にひっかかった鳥がありそうだからいな、はなはだ怪けしからんりょうけん量見で、池のほとりを、歩いて居ったのでございますから。

が、婆さんの行った後には、もう早立ちの旅人と見えて、伴ともの下人に荷を負わせた虫の垂衣たれぎぬの女が一人、市女笠いちめがさの下から建札を読んで居るのでございます。そこで恵印は大事をとって、一生懸命笑かを噛み殺しながら、自分も建札の前に立って一応読むようなふりをすると、あの大鼻の赤鼻をさも不思議そうに鳴らして見せて、それからのそのそ興福寺の方へ引返して参りました。

その朝でさえ『三月三日この池より竜昇らんずるなり』の建札は、これほどの利き目がございましたから、まして一日二日と経って見ますと、奈良の町中どこへ行っても、この猿沢の池の竜うわさの噂うわさが出ない所はございません。元より中には『あの建札も誰かの悪戯であろう』など申すものもございましたが、折から京では神泉苑の竜が天上いた致したなどと申す評判もございましたので、そう云うものさえ内心では半信半疑と申しましようか、事によるとそんな大変があるかも知れないくらいな気にはなっていたのでございます。

するとここにまた思いもよらない不思議が起ったと申しますのは、春日あやしうの御社に仕えて居りますある禰ね直ぎの一人娘で、とって九つになりますのが、ある夜母の膝を枕にしてとうとうと致して居りますと、天から一匹の黒竜が降って来て、

『わしいよいよ三月三日に天上する事になったが、決してお前たち町のものに迷惑つもりはかけない心算だから、どうか安心していてくれい』

と人語を放って申しました。そこで娘は目がさめるとすぐにこれこれこうこう

と母親に話しましたので、さては猿沢の池の竜が夢枕に立ったのだと、たちまちまたそれが町中の大評判になったではございませんか。

こうなると話にも尾鱗がついて、やれあすこの稚児にも竜が憑いて歌を詠んだの、やれここの巫女にも竜が現れて託宣をしたのと、まるでその猿沢の池の竜が今にもあの水の上へ、首でも出しそうな騒ぎでございます。

いや、首までは出しも致しますまいが、その中に竜の正体を、目のあたりにしかと見とどけたと申す男さえ出て参りました。これは毎朝川魚を市へ売りに出ます老爺で、その日もまだうす暗いのに猿沢の池へかかりますと、あの采女柳の枝垂れたあたり、建札のある堤の下に漫々と湛えた夜明け前の水が、そこだけほんのりとうす明く見えたそうでございます。

何分にも竜の噂がやかましい時分でございますから、『さては竜神の御出ましか』と、嬉しいともつかず、恐いともつかず、ただぶるぶる胸震いをしながら、川魚の荷をそこへ置くなり、ぬき足にそっと忍び寄ると、采女柳につかまって、透かすように、池を窺いました。するとそのほの明い水の底に、黒金の鎖を巻いたような何とも知れない怪しい物が、じっと蟠って居りましたが、たちまち人音に驚いたのか、ずるりとそのとぐろをほどきますと、見る見る池の面に水脈が立って、怪しい物の姿はどことも知れず消え失せてしまったそうでございます。が、これを見ました老爺は、やがて総身に汗をかいて、荷を下した所へ来て見ますと、いつの間にか鯉鮒合せて二十尾もいた商売物がなくなっていたようで、『大方劫を経た獺にでも欺されたのであろう』などと晒うものもございました。けれども中には『竜王が鎮護遊ばすあの池に獺の棲もう筈もないから、それはきっと竜王が魚鱗の命を御憫みになって、御自分のいらっしゃる池の中へ御召し寄せなすったのに相違ない』と申すものも、思いのほか多かったようでございます。

その内に追い追い日数が経って、とうとう竜の天上する三月三日になってしまいました。そこで恵印は約束の手前、今更ほかに致し方もございませんから、渋々叔母の尼の伴をして、猿沢の池が一目に見えるあの興福寺の南大門の石段の上へ参りました。丁度その日は空もほがらかに晴れ渡って、門の風鐸を鳴らすほどの風さえ吹く気色はございませんでしたが、それでも今日と云う今日を待ち兼ねていた見物は、奈良の町は申すに及ばず、河内、和泉、摂津、播磨、山城、近江、丹波の国々からも押し寄せて参ったのでございましょう。石段の上に立って眺めますと、見渡す限り西も東も一面の人の海で、それがまた末はほのぼのと霞をかけた二条の大路のはてのはてまで、ありとあらゆる烏帽子の波をざわめかせて居るのでございます。と思うとそのところどころには、青糸毛だの、赤糸毛だの、あるいはまた梅檀庇だのの数寄を凝らした牛車が、のっしりとあたりの人波を抑えて、屋形に打った金銀の金具を折からうららかな春の日ざしに、眩ゆくきらめかせて居りました。そのほか、日傘をかざすもの、平張を空に張り渡すもの、あ

るいはまた<sup>ぎょうぎょう</sup>仰々しく<sup>さしき</sup>棧敷を路に連ねるもの　まるで目の下の池のまわりは時  
ならない加茂の祭でも渡りそうな景色でございます。

これを見た恵印法師はまさかあの建札を立てたばかりで、これほどの大騒ぎが  
始まろうとは夢にも思わずに居りましたから、さも呆れ返ったように叔母の尼の  
方をふり向きますと、『いやはや、飛んでもない人出でござるな。』と情けない声  
で申したきり、さすがに今日は大鼻を鳴らすだけの元気も出ないと見えて、その  
まま南大門の柱の根がたへ意気地なく<sup>うずくま</sup>蹲ってしまいました。

すると恵印がそこへ来てから、やがて半日もすぎた時分、まるで線香の煙のよ  
うな一すじの雲が中空にたなびいたと思えますと、見る間にそれが大きくなって、  
今までのどかに晴れていた空が、<sup>にわか</sup>俄にうす暗く変りました。

その途端に一陣の風がさっと、猿沢の池に落ちて、鏡のように見えた水の面に  
無数の波を描きましたが、さすがに覚悟はしていながら慌てまどった見物が、あ  
れよあれよと申す間もなく、天を傾けてまっ白にどっと雨が降り出したではござ  
いせんか。のみならず<sup>かみなり</sup>神鳴も急に凄じく鳴りはためいて、絶えず稲妻が<sup>あさ</sup>桜のよ  
うに飛びちがうのでございます。それが一度鍵の手に群る雲を引っ裂いて、余る  
勢いに池の水を柱のごとく捲き起したようでもございましたが、恵印の眼にはその  
刹那、その水煙と雲との間に、金色の爪を<sup>ひらめ</sup>閃かせて一文字に空へ昇って行く十丈  
あまりの黒竜が、<sup>もうろう</sup>朦朧として映りました。が、それは<sup>またた</sup>瞬く暇で、後はただ風雨の  
中に、池をめぐった桜の花がまっ暗な空へ飛ぶのばかり見えたと申す事でござい  
ます　度を失った見物が右往左往に逃げ惑<sup>まど</sup>って、池にも劣らない人波を稲妻の  
下で打たせた事は、今更別に<sup>またた</sup>くたたく申し上るまでもございませぬ。

その後恵印は何かの拍子に、実はあの建札は自分の悪戯だったと申す事を白状  
してしまいましたが、仲間の法師は一人もその白状をほんとうとは思わなかった  
そうでございます。これで一体あの建札の悪戯は<sup>あた</sup>凶星に中ったのでございませぬ  
うか。それとも的を外れたのでございませぬうか。鼻蔵の、鼻蔵人の、大鼻の蔵  
人得業の恵印法師に尋ねましても、恐らくこの返答ばかりは致し兼ねるのに相違  
ございませぬ……

---

そうなんです。不思議なことに猿沢の池から龍は昇って、恵印法師が高札に書  
いたことは実現されるんです。この作品は元の話が「宇治拾遺物語」にあって、  
鼻の大きな恵印という登場人物も、話の設定もほぼ同じなんです、最後の結幕  
が違う、龍は昇らないんです。何も起こらない　これが元の話なんです、物  
語の種としては、元のほうが人間心理が端的に描かれていて面白い。

芥川のこの作品は中期の「蜘蛛の糸」とか「地獄変」といった秀作と同じ時期  
の作品ですがあまり評価が高くない。しかし、この頃芥川龍之介の筆名は上り調  
子で、だから龍を上らせたという説も、ないこともないので。